

『賃上げ交渉』

田中「川村先輩、うちの会社どうなってるんですか。」

先輩「なにが？」

田中「何がじゃありませんよ。給料が安すぎますよ。」

先輩「そうか？」

田中「そうですよ。まあ、社員寮で家賃はないし、社食も無料ですから、生活に困ることはありませんけど、この間出来心で月給を労働時間で割って時給換算したら、12円80銭だったんですから」

先輩「ハハ、明治時代だな」

田中「笑い事じゃないですよ。なんでこんな安月給なんですか？うちの会社は」

先輩「お前まだ入って3年かそこらだろ？まだ給料が金だけでしたよ。俺が入ったときは年収二十石だったからな」

田中「石って江戸時代じゃないですか！

先輩「だから、俺とお前の数年の間に開国したってことだな」

田中「今、令和ですよ！俺、社長に給料アップの直談判に行ってきますよ！」

先輩「待て待て、お前は社長のことを何にも知らないだろ。うちの社長は世間知らずなんだよ。世の中に金が回ってることもよくわかっていないんだよ。」

田中「そんなのでよく経営者が務まりますね」

先輩「とにかくそんな社長を説得するには一筋縄ではいかないだろ。丸腰で行っても歯が立たないだろうからまずは知恵をつけてもらいに行け。俺の知り合いに郷土史に詳しい阿部さんというかたがいるから、相談してみたらどうだ？」

田中「そうですか。ありがとうございます。あの、先輩が交渉に立ち会うのじゃダメなんですか？」

先輩「俺いやだよ。下手したらくびかも知れないし」

田中「え？賃上げ交渉で下手打つとくびですか？でも今不景気で再就職も難しそうだな」

先輩「何言ってんだよ。会社を首になるんじゃないかと、無礼を働いたってんで打ち首になるってんだよ」

田中「え？賃上げ交渉で下手打つと命を落とすんですか？いやいや、そんな危ない橋渡れませんかから、辛抱しますよ」

先輩「(電話しながら) はい、はい。ありがとうございます。よろしく願います。阿部さんアポとれたぞ。明後日話聞いてこい」

田中「はや！仕事の時はだらだらしていて遅いくせに、こういう時だけ素早いんですね」

先輩「当たり前だろ。田中の人生をかけた賃上げ要求。こんなに面白いことがあるか！協力は惜しまないからそのつもりでいろ！ただし、交渉の際に俺が協力したということは一切口外するなよ。」

田中「ずるいですよ！外野で顛末だけ見届けるなんて。」

先輩「まあ、この会社の未来のためと思って、きちんと知恵を授かってこい！」

この日はこれで済みまして、あくる日の朝

先輩「おはよう、田中。明日話を聞く阿部さんから預かりものだ」

田中「なんですか？」

先輩「明日話をするにあたってこの資料に目を通してから来てもらいたってことだ」

田中「え？こんな山のような資料にですか？」

先輩「ああ、仕事の合間に目を通しておいてくれ。」

田中「おれ、給料上げたいだけなんです。だいたい、これだけの資料に目を通すって、就業時間内に収まりませんよ。」

先輩「じゃあ、残業だな」

田中「残業ですか？」

先輩「言っとくけど、残業代は出ないぞ」

田中「給料増やしたいのに仕事が増えてるじゃないですか」

先輩「まあまあ、将来への投資と思って頑張れよ」

田中「先輩のそういう他人事に思ってるくせに楽しんでる態度が一番腹立ちますね」

先輩「給料上がったら、おごってくれよな」

田中「誰がおごるかー！」

阿部「田中さん、朝早くからようこそお越しくださいました。わたくしは阿部俊夫と申します。」

田中「初めまして、田中と申します。まさかご自宅へお招きいただけるとは思いませんでした」

阿部「ええ、家のほうが何かと都合がいいですから。ではこちらへどうぞ」

田中「お邪魔いたします。…すごいですね。プロジェクターにスクリーン。」

阿部「これから、パワーポイントを使って概要を説明しますね。」

田中「はあ」

阿部「…というわけで、慶長6年に、この早股村より掘削を始めた木曳堀、通称貞山堀は、現在でも日本一の運河として悠々と水をたたえているのでございます。それでは、来週は、貞山堀の掘削を手掛けた川村孫兵衛と、我が阿部家とのつながりについてお話させていただきますので、次回までにこの資料を読み込んでおいてください」

田中「先輩、行ってきましたよ」
先輩「おう、何か収穫はあったか？」
田中「いや、岩沼と貞山堀の歴史について半日みっちりスライドショーで説明されまして、続きはまた来週ってんでまた山のような資料を渡されましたよ」
先輩「あー、ちょっと伝え方が悪かったかな」
田中「なんて話してたんですか？」
先輩「うちの若いのが行くからいろいろ教えてやってくれますか？」
田中「それはさすがに端折りすぎですよ」
先輩「面倒になっちゃって」
田中「面倒ってなんですか。協力は惜しまないって言ったんですから責任持ってくださいよ！」
先輩「悪い悪い。阿部さんには連絡入れておくからさ」
田中「お願いしますよ。そういえば、先輩の名字川村ですよ。」
先輩「そうだよ」
田中「阿部さんの所で話に出てきた、川村孫兵衛って先輩と何か関係あるんですか？」
先輩「先祖だよ」
田中「ええ？先輩偉人の子孫だったんですか？全然そんな風情ないじゃないですか」
先輩「風情ないたって、もう何代も前だからな。でも俺も先祖の名前にあやかって命名されてるしな。」
田中「先輩の名前なんでしたっけ？」
先輩「川村玄孫ベえ」
田中「孫兵衛の子孫で玄孫ベえ？先輩、つらい人生送ってきたんですね」
先輩「名前だけで判断するなよ。俺も生まれは北海道だけど、先祖が玉浦に暮らしていたって聞いて、それで興味を持ってこっちに移ってきたんだよ。そこで郷土史の研究をしているっていう阿部さんと知り合って先祖のことをいろいろ教えてもらったと、こういうことだな。」
田中「ああ、そうだったんですね。ずいぶん歳は離れているのにどこで知り合ったのかと思ってました。そうだ、帰りがけに来週使う資料を預かりまして、目を通しておいてくれて話なんですけど、郷土史について教わるわけじゃないんで、そのままお返しすればいいですかね？」
先輩「まあ、それはせっかくだから読み込んどいて」
田中「また残業かー」

阿部「田中さんこの間は失礼しました。川村さんから教えてやってもらいたいとの連絡をいただいていたもので、てっきり郷土史についてだと思ひましてね。」
田中「いえいえ、とんでもないです。かえって先輩の説明不足で済みませんでした。」

阿部「なんでも、給料の安さに困っているそうで」

田中「そうなんですよ」

阿部「まあ、しかし、歴史に学ぶということもありますし、私は郷土史研究をしていますから、その視点でアドバイスできるといいのですが。」

田中「ぜひお願いします」

阿部「先週お話しした通り、玉浦の道には柵形という直角に曲がったところがいくらか見受けられます。この柵形は矢野目城の名残で、敵の侵入を防ぐために、わざと直角に道を曲げているというものです。」

田中「はい。営業行くときによく見かけますね。夜は暗いので、危ないんですね。」

阿部「そうです。もともと柵形は、馬で侵入しようとした際に直線と見せかけて急に角を作ることにより、馬が曲がり切れず堀や穴に落とすという一つの罠として作られました。今でも数多く柵形は残ってますので、そこへ社長の車を誘い込み、落とし穴に落とせば少ない労力で葬ることができます」

田中「え？あ、あの」

阿部「もしくは、これは平安時代の話ですが、当時の征夷大將軍の坂上田村麻呂が岩沼の地を訪れた時、地元住民から『大きなカニが農作物を荒らして困る。何とかしてもらいたい』と相談を受けた。田村麻呂はカニの住む巣穴を見て、住民に『大きな釜に湯を沸かして、巣穴の上の崖に設置』するよう指示した。大ガニが餌をあさるために巣穴から出て来たところを、上から煮え湯をかけてゆで上げてしまったという話が残っています。」

田中「はあ。」

阿部「そこで、社長を柵形におびき寄せて落とし穴に落とし、上から煮え湯をぶっかけるというのはいかがでしょうか」

田中「いかがでしょうって、そんな乱暴なことしなくてもいいんですよ。私はただ給料を上げる交渉を社長としたいだけなんですから」

阿部「え？」

田中「え？って何ですか？先輩から聞いていませんか？」

阿部「川村さんからは、安月給で苦しんでいるから社長を懲らしめて憂さを晴らしたいって話だから、何か知恵を貸してくれといわれましたが」

田中「え？」

阿部「え？」

田中「え？」

阿部「え？」

田中「先輩勘弁してくださいよ。阿部さんに適当なこと言うから、当人、社長をやる気満々だったじゃないですか。なんであんな適当なこと言ったんですか」

先輩「いや、面白いかなーと思って。つい出来心で」

田中「冗談じゃありませんよ。懲らしめるどころじゃなくて、ほとんど暗殺計画を提案されたんですよこっちは。」

先輩「そうかそうか。悪かったよ。次回はちゃんと賃上げ交渉のアドバイスをしてもらえるように話しておくから」

田中「お願いしますよ本当に」

阿部「どうも、先週はとんだ勘違いをいたしまして失礼をいたしました。」

田中「いえ、とんでもないです。先輩が面白がってわかりにくいように言っただけですから」

阿部「あの、給料が安くて困っているから、社長に対して賃上げ交渉をしたいと、ついては交渉するための知恵を貸してもらいたいと、こういうことでよろしいですか？」

田中「その通りです」

阿部「本当に？」

田中「ああ、疑心暗鬼になっていらっしゃる。何もしてないのに間接的にオオカミ少年になった気分だ。そうです。交渉について何かいい知恵はありますか？」

阿部「岩沼の中でも、矢野目という地域には、矢野目足軽という伊達家直参の鉄砲隊が暮らしておりましたが、その足軽たちが、たびたび仙台藩へ借金の交渉をしに行っていたそうです。」

田中「三週目にして、ようやく有益なお話を聞けそうですね。」

阿部「交渉の際には、生活の窮状を訴え、訓練の成果を報告して、『これだけやっているんだから金をくれ』というようなことを言っていたようです」

田中「なるほど。では、それを踏まえてどのように交渉すればいいんですか？」

阿部「そうですね。こういうのはいかがでしょう。田中さんの一日のスケジュールを出して、これだけの働きをされていて、会社の売りに貢献しているとアピールし、また、今の給金ではまともに暮らせないということを伝え、データを示した上に情に訴える、波状攻撃はいかがでしょう？」

田中「それだ！ありがとうございます！」

田中「先輩おはようございます」

先輩「おう田中。どうだった？」

田中「いやあ、いいこと聞けましたよ。矢野目足軽の借金交渉術を応用して、賃金交渉をしようと思います。」

先輩「おーそうか。なんだかよくわからんが頑張れよ」

田中「先輩は阿部さんを紹介してくれた以外はちっとも役に立ちませんでしたが、ありがとうございました」

先輩「おいおい、ほめるなよ」

田中「皮肉が通じないなこの人は。とりあえず、資料をまとめて、今週社長にあつてきますよ」

田中「つまり社長、私はこれだけの働きをしているにもかかわらず、給料に反映されていないのです。ああこれでは、暮らしが立ち行かず、業務にも支障が出る始末。どうぞ昇給のご判断をお願いいたします。」

社長「おお、さようであるか。やはり世の中を見なければいかんな。今は金がなければ暮らせぬか」

田中「世間知らずにもほどがあるだろ…。はい、衣食住は保証されていますが、人間というものはそれだけでは暮らしていきません。お金があることで精神的な余裕が生まれ、業務効率もアップします。お金は目に見える評価のあかしとして、必要なものと考えておりますが、いかがでしょうか」

社長「ほお、金がその人間の評価を反映すると申すか。うむ、相分かった。しからば今後は給金にそのものの働きを反映するでしょう。」

田中「本当ですか？ありがとうございます！」

社長「しかし田中、そのほうの三年の働きから鑑みるに、資料をそろえて交渉をするという考えには至らぬのではないかと思うがの。そのほうに知恵を授けたものがおるのではないか？」

田中「す、鋭い…。実は、川村先輩に相談をしたら阿部さんという方を紹介していただきまして、その方の知恵でこのような資料をそろえました。」

社長「なに、川村が差し金であったか。では、急ぎ川村を呼んでまいるのじゃ！」

田中「は、はは一」

田中「先輩、社長と初めて面と向かって話しましたが、なんだか殿様みたいな社長ですね」

先輩「そうだろ。あの社長なら初任給がコメでもうなずけるだろ」

田中「確かに」

先輩「それで、給料はどうなったの？」

田中「はい、今後は業績や働きに応じて給料を上げるって言ってもらいました。それから先輩、今すぐ社長室に行ってください」

先輩「なんで？」

田中「社長に、俺の一料簡で交渉をしてないってことがばれまして、しょうがなく先輩の名前出しちゃいました。」

先輩「おい、なんてことしてくれたんだ！俺の名前出すなって言っただろ」

田中「いやあ、すいません。でも、社長に会ってわかりましたけど。あんな感じなら無礼家もしそうですよね。先輩、もしかすると俺の無礼な進言の責任をとれって言って、打ち

首かもしれませんね」

先輩「おい冗談じゃないよ。」

田中「ご愁傷さまです」

先輩「いきいきするな！」

田中「先輩どうでした？」

先輩「た、田中」

田中「どうしたんですか？そんなに青ざめて。もしかして本当にくびですか？」

先輩「ち、違うんだよ。社長室に行ったら、田中の給料の交渉を後押ししたのはお前だろう。後輩の一步を踏み出させたあっぱれな働きだって言って、来季から月給 2000 万になるみたい」

田中「は？ちょっと、先輩！後押ししたって面白がってはたで見ていただけじゃないですか！」

先輩「いやー、後押しした甲斐があったな。」

田中「社長も中途ってもんがないんですかね。しかし先輩、阿部さんを俺に紹介しただけで月 2000 万ももらえるようになるなんて、ついてますね。」

先輩「当たり前だろ、俺は貞山堀を手掛けた川村孫兵衛の子孫だ、うんがいい」